



前九年繪詞

乞

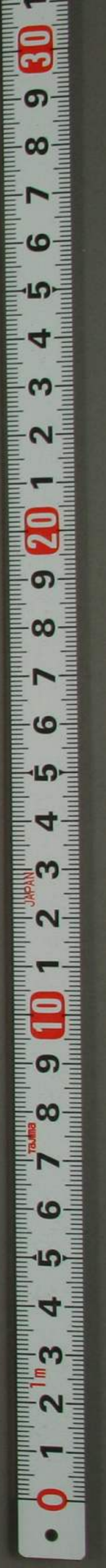
天

夢

第卅四

前九年繪詞

9甲5
2010



門外
第 2010
巻



え
ま

く

1

吉彦秀方吉彦武將軍東照 忠貞忠貞

城乃中中かく守て 御方此

軍をそにたつと侍よきり

うこほくの力をほくすもか

くあまし 志し 戦と 水と 然

多きま紀てふわたを
其糧食つしれさ
つらおちるさ
つて陣とつて
二方にお軍これと満く一
方

名義光とさしと海く一
方名
清衡重宗と礼とま
か
日教紙、多る福と武
漸、名
了龜次並次といふ
二人乃
打子あまなま
ひなま
無也

これと志えうらとるるに
武衛使 賊將軍 陣に
あきて 沈息して かく戦や
めり 礼と 凌然か あり 龜
次と 兵に 守ち 守り 守りて

諸人寸履しう 然るも志
る 危き 稔年 一人 出て 女
あま せく 老を 己 沈然と なる
赤めり 禮 侍人 さま かく 礼
繁 物 守り 矣 長 寺 討 手 也

求よ次任の舎人 鬼武也
伊ふ者あゝ心をげく身は力
ゆゑかゝる者あゝ志を越えし
くまたる鬼次郎乃中を
よくきくはよ二人 関の底ふ

よちあゆりあむれいこ目
と多しは氣をいふあむ
はくふよあひてうらあふ
事守附たりをうひよ伊つ
す起まあゝともしみは伊つる

子龜次系。校刀のほさい志よ
甲ふ何ある屋うに見ゆはと
了。龜次。以冒まきあ。鬼
武。あまられたのはさかふ。あ
おち想あ

將軍乃いくさねの時をほ
く。あての志。辭。天城ひ。に
あ。越み。く。城。中。此。吾。龜次
を。あ。礼。と。守。ら。よ。あ。徳。と。首。
あ。あ。あ。く。あ。出。お。軍。乃。あ。又

頭乃骨子阿て死にまら礼
者於取の切目よわくい多
飯まらもかまらすてこがま
いてまらり刃る者慚愧まら水
ふら取しお事これまら

てか取まらいて
るまらとよらまら
まらまらあまら人一旦まら
あはまら紙かまら必し如まら
かまらまらまら取乃物まら
まらまらてのまらまらまら
病

乃志さるるは、ひきかへ

家衡の女の子任といふ者

逐くこれに應じ、立て替へ

られちしく、將軍よ、いふや、汝の父

頼義、自任宗、任職うら、吾は

して名簿を法、言く、右清

將軍をかこ、ひきかへ、まうれり

備よう、此力、よして、吾は、自任

おとらえを、の思、誠にも、気、法

試いた、まきて、伊つ、ま、乃、世、の、心

くひこそさける。毎たれまのまぢ
海までふ相傳の家人としてかこ
志軍家く重恩れ君とせめ
てまづ不忠不義乃法見はこめ
て天乃のせゆんとかぶら舞

いおほくれをな乃くをらさ
まらぬんかきんか
得軍せりてまのいたむ將
軍乃い媽やうを子任を任
軍とるまに志こらもたあ。羅名

かきつを絶んよ命とせんとらんちあ
わく多よきし加路ら舞水
い梅 名あり
きて乃ら食法きて男女
みれふ言記ふれ
志む武衛義光よ

付く際とふ義光このよ
將軍ふらむ將軍あらくゆ
の守武衛た成祢んか路
於詞とせらて義光とから
元くいらく日か君かあれ

己のあんな志ありを方代の後
よれう朝政子雲の外は
まはれむ
如といえくわとまはらむむ
いふかこらあしん孔ふよるまで
いふ武衡かきおく義光は
いふ

やう湯身波給事ある人
志ある人また使一人を給て
思ふとよく申しむかむといふ
義光郎おもしろ中誰
物こしよとあふみれ孝方

と我まりのあといはひにじりあはく
季の紙やぬ阿ふき此かつとあ紙
よむらん乃ちう備をいさへ右刀を
うわ紙をまききりわ紙のと初て開
くまうに人むらまを入城中

の巻がまはれいといふ高なるい
箭右刀かこれ林れいといふ志者
くして刃んち紙いさめりも季方より
ふ身紙ういさてあゆみ入家の
かすのが糸く井ぬ武衡

出合川のりくよふ季方ちく
およるまてあの家衛とかく
て次武衛を紙もくせく
とせ給くと無業殿より申さる
まより紙立て金多くおわいて

と無業季方の上様城中乃
財物とら給はるる無業とら
治かち我らのまのまてはあ
むをれといひあさ守武衛とら
よわ大なるやなきらいては禮

る誰人の矢よそ侍よこし乃矢
此来より、系好くすあゝるい
らね、志みふかき、忠をさしむ、女
孝かゝるく、いさく、ねる、母の、事
かたよと、ふ、又、直、也、て、い、ふ、も、か
ら

き、一、家、を、志、ち、ふ、さ、し、と、ね
さ、あ、く、い、ま、あ、く、そ、み、あ、く、何
ふ、も、志、強、く、さ、る、と、出、じ、り、ら、こ
ほ、く、此、矢、乃、中、に、く、と、か、く、も
せ、礼、舞、い、ま、い、あ、て、目、あ、く、侍

清て子後

侍る身といふ武衛、いふも、うお
海にあらんよ、事には、あは
多きく、由給て、よく、申給
（い）と、乞く、や、法、孝、方、は、い、の、
おとく、よ、兵、乃、中、誠、之、者、く
の、願、の、時

あら、此、海、の、う、り、手、を、か、り、ま、て
う、ち、意、を、て、ま、さ、し、と、あ、ま、さ、か、ら、
い、し、た、事、あ、く、て、阿、好、見、い、て
ま、あ、な、ま、の、世、お、ほ、冬、これ
乃、ち、い、よ、く、の、志、あ、な、ま、あ、
よ、あ、

城をまゐりて林よも冬よと
よひぬさむくはめこくふあま
みれあきておのくみれし見
ていふやうにせり、とくふ大音
あし事とてふと力明。此

事あや音にあひあまあ
志なむしとすいふ
うひあ子とも見れ因府よ
あも各いそが京ののかる
まといひあふくあこと

采はしてはるはくし宅者
おほきて志はんとす志は城
うらぐ糧料やいづ候
もして京のゆのかくし
ひきてわのたふらう起をたけ
城

ぬき乃はるはくし宅者
屋敷城中飢よのみま
室は女小室やふら城戸
と海ていてはる軍とみ
城あましくは城とみ

るのきりふと紙よぬをうらう禮
とてふあし時なわともさくおちん
事紙移ふこれくきり取の
雜女童うら城申乃魯とも
の愛あお子ともたわ城申

よちうハ友人ひとわらひ

あの子よ

物く是せぬ事あるまお物

く一冊よれうきさく

長禮志は城申乃そい

ますくさくはく魚きかなると

いふ將軍これと申して尤も
如くもいひてくさくさの
や川とみれぬのうらや
すあま越みくなく城乃戸と
やちくくさくさの

さ。

詞 左女侍保循

太

竟然法親王芳翰行忠郷筆保脩約
筆為吾師柳條先生換之千時天明
元年八月上院換寫切畢

歷代太源詮要

慶長八年二月十二日源家康公
征夷大將軍の宣旨を賜ふに
大臣を聘し給ふに乃長者と
多將字淳和兩院の別當を
給ふに一旦乃教を

はしとよの累祖武の御御成を
東夷西戎をうけ治めり此熟切院
おほひがわといふとあむ事あり
仁義を守文道も世に伝ふ
十日視とくろく子乃てす所あり

かゝるはこ位も昂然たり
同平三月古又日御参内あり
此文牛車に宮首に象形此物
志の糖前磁庵は随月雜色
てもおもひにくく并藤とて

字跡は洛中の男女襪子みら
手紙形はあてていふかきか
反上
月卿は容服を乃
かたのあのをなしてはし
志は
繪をとりて

今も君は命を以て政を
万國風静は八鴻は波治は
奇牧笛は
先

家康公系內之圖

右詞書外法院二品親王
竟然之染毫也畫圖狩野
法眼守信之取描也為後

來飛鑑加走尖鬼而已

慶安二年臘月十七日

毗沙門堂大僧正公海

右卷物小笠原重元州前夜

寫字川及

或^あ年^と廿九月九日^に負^お任^と五百餘^よ騎^き此

夷^い賊^{ろく}を相^あ具^いて 出^い來^そて陣^ち條^じ乃^の使^つを

之^こて^しり^と河^か云^のと日^にこ^しり^と菊^き酒^{さけ}を

酌^{しやく}て^し真^ま宴^{えん}越^こい^とき^に日^に也^{なり}君^{きみ}を

當^{たう}國^{こく}并^に刑^{けい}史^し也^{なり}負^お任^と亦^{また}其^{その}中^{ちゆう}此^{こゝ}懸^{けん}首^{くび}

也せら節く佐ををせん逢せ久んくこめふ系せん向かうする

ごころご也ご後ごう藤きのり内のり則あつ明つを返事事云云汝汝逢逢

節節佐佐をを逢逢せせむむへへききりり同きこう食食をを逢逢

いちのえうま日日飲飲失失逢逢起起度度ありあり早あうくく小もて拍拍系系逢逢

きき也也ごごろろ内内負負任任宗宗任任良良小小収収てて鼓鼓をを

ううらら軍いん呼呼してして就おう来来るる御お方方同同鼓鼓ををう

ちち河河をを流流りり高高向向ててるる戦せん次次己己時時も

第や一あ自を内のりりり五ごてて龍み入入劔劔をを逢逢てて合か戦せん

そそれれごごろろ人人勝せう負負かかしし負負任任方方小小死し者者百百餘餘

人人痲まをを被か者者九九十十餘餘人人御お方方小小死し者者

六十餘人^{きこ}祓^{はら}を被^か者六十餘人也

安大夫^{あき}頼時^{より}うむこ藤原^{あし}経清^{つねきよ}平^へ永衡^{えいへい}

とい多^{もの}者^{もの}あり大夫^{だいふ}をそへ小^こ謀^{まう}叛^{はん}をそへ

をみく志^しうと^と候^{こう}うむまこ^{まこ}國^{くに}府^ふをこま^まい

まり^{あり}武^ぶ者^{もの}将^{しょう}軍^{ぐん}小^こ語^ご云^い永^{えい}衡^{へい}伊^い方^{かた}へ参^{まゐ}

ま^まり^り志^しい^い庭^{にわ}と^とん^ん内^{うち}ん^んよ^よい^いさ^さこ^こ免^{めん}と^とあ^あ大^{だい}

夫^おを^をわ^わま^まれ^れ志^しお^およ^よ六^む波^は伏^{ふく}乃^な有^{あり}様^{さま}を^をよ^よ

く^く毒^{どく}害^{がい}れ^れん^んあ^あく^くん^んの^の常^{じょう}よ^よ伊^い方^{かた}軍^{ぐん}の^の

有^{あり}様^{さま}を^をつ^つあ^あや^やく^くん^んき^きめ^め也^也永^{えい}衡^{へい}を^をよ^よれ

前^{ぜん}月^{げつ}登^{のぼ}任^{にん}れ^れ郎^{らう}等^{とう}也^也苗^{なう}國^{こく}より^{より}下^げ向^{かう}志^しを^を

あつゝ恩を蒙て一郡を領するを大夫とむ
と成これと國司と大夫と相戦間大夫の方
よ寄つて主恩乃主を射る者も
著るるるる此甲銀して人なり

これ戦の間大夫の兵よみしをまていられ

志と様をも申也そえやふしれをき
らるゝ志と云將軍この申て用て永衡を切
川宗とある郎亦田人同あれを切つ麦種
清恩を抱て安んずる竊は郎亦らよ語
云前車此後ハ後車此は志みなり十郎

去てよきならぬ我わが又何日いつの日かの死しと云ふ所ところに

云い君きみううここふふかくかく物もの平へいふふ仕しとと思おもふふなりなり統いつとと統いつ

言い必かならず出い来きてて安やすみみかかくくんん快た早はや途とてて本もと此こゝ

如ごとくくおお大だい夫ふうふふ随ま行ゆぬぬ君きみ獨ひとり真ま此こゝ肉にくををももん

了し了しをを嗟あはらんん甲か斐いありり麦あ經に清き交ま

夜よ越こぬぬてて物もの平へいよよ申ま云い大だい夫ふう兵へいをを

國くに廢へすすてて宗むね 妻つま子こをを棄すてて

とと云いふふ也なりとと云い物もの軍ぐん是これをを固かてて大だいにに敵たりりてて

國くに府ふをを白しろ給たまぬぬるる此こゝ所ところにに不ふ經か清き私し此こゝ

郎らう等とう八はち百ひゃく餘あまり人ひとをを相あ見みぬぬ大だい夫ふうのの許もとへへ

近^{ちか}めて^く種^{たね}く^くれ^れ悪^{あく}行^{ぎやう}をい^いき^き次^{つぎ}回^{かい}守^{まも}り^りは^は清^{きよ}
を^を誅^{ちゆう}罰^{ばつ}さ^さく^くき^きよ^よ思^{おも}ふ^ふ

を^を奪^{うば}え^え私^{わが}乃^の亭^{てい}よ^よゆ^ゆて

家^け人^{にん}ふ^ふよ

登^{のぼ}任^{にん}仲^{なつ}乃^の頼^{たの}良^らふ

を^を誅^{ちゆう}さ^さふ^ふよ^よを^を守^{まも}り^り

罰^{ばつ}さ^さく^くき^き

う^う一^{いち}証^{しやう}を^をま^まじ^じり^り王^{わう}事^じに^にあ^あり^りき^き 固^こ

衆^{しゆう}を^をふ^ふよ^よ思^{おも}い^いあり^りか^か乃^のふ^ふき^きく^く唐^{たう}太^{たい}宗^{そう}

皇^{わう}を^をこ^こく^く實^{じつ}戦^{せん}職^{しやく}志^しく^くよ^よこ^こ新^{しん}

代^{だい}を^をこ^こく^く

本^{ほん}朝^{ちゆう}よ^よ藤^{とう}原^{げん}利^り仁^に鬼^き

神^{かみ}の^の城^{しろ}を^をせ^せる^る時^{とき}神^{かみ}明^{めい}力^{りき}を^をあ^ある^る

古く書かれた紙色上、文字が白く
但し古く書かれた文字が白く

近年加増するものあり

